
真紅の館の姫君（S）

KAHORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の館の姫君（S）

【Nコード】

N0187Y

【作者名】

KAHORI

【あらすじ】

地の底にある魔法王国の貴族の娘であるヴィアーナは兄しか知らない十八の娘。近頃兄の様子がおかしくて…。（ムーンライトノベルズで発表している同タイトルの作品のR15版です）。

真紅の兄と妹

高い高い塀の中、ヴィアーナは今日もじょうろを手に、庭で真紅の薔薇の世話をしていた。この庭には赤い花しか存在しない。赤はこの家を象徴する色だからだ。

今年で十八になるヴィアーナの肌はこの上無く白く滑らか、髪は純度の高い紅玉^{ルビー}が彼女の頭から溶けて流れたような煌く真紅、優美な眉も、睫毛も、ふくよかな唇も赤なら、瞳もまた深い真紅だった。着ているドレスも血のように赤い。

ヴィアーナはふと空を見上げる。空は紫色を帯びた黄昏の色を呈していた。地底にあるこの国　神話の時代に活躍した、魔力甚大なる紫眼の竜の子孫である魔王が治めるヴァール・ドゥナ・ガーシユは、もともと光の射さぬ空間なのだが、城の有能な宮廷魔術師が魔法で刻々と色を変じて民の目を楽しませてくれているらしい。光源は見当たらずと言いつのに明度を変える不思議な空には時に雲が流れ、星が出る。

兄はまだ帰らないのだろうか。ヴィアーナは溜息を吐きながら、空に、大いなる真紅の鷹の幻影を見る。

ヴィアーナには年が五つばかり離れた兄がいた。この屋敷、ヴァール・ドゥナ・ガーシユきつての貴族であるヴァリドゥー家の当主ハディール。彼は真紅の鷹に姿を変じ、強大な魔力をもって地上に住む魔力を持たぬ下等な生き物である人間どもを脅かし、日々、ヴィアーナ達の住む地底世界の存在を知らしめている。ハディールの不興を買った人間の町は一瞬の内に灰燼に帰した。ヴィアーナは兄ほど美しく素晴らしい青年を知らない。

（お兄様、今日はどんなお土産を持ってきたさるのかしら）

ヴィアーナが手を止めていた水やりをまた始めようとしたその時、視界の隅に小さな影を確認し、再び空を見上げた。兄だ。

「お兄様！」

じょうろを赤煉瓦の花壇に置き、ヴィアーナは両手を広げて兄飛来する真紅の鷹の方へ駆け寄る。鷹の大きさは、広げた翼の端から端までが手を広げたヴィアーナの倍はある。鷹は薔薇を散らさぬ様にか、いったん塀の上に止まり、せわしく羽ばたきながら翼を収めた。

「お帰りなさい、ハデイルお兄様 今日人間を幾つ消されたのかしら 聞くまでもないわね」

鷹は次の瞬間、金や黒の刺繍で装飾された真紅の衣を纏った丈高い青年の姿に変じた。塀に佇んだままの体勢で、すくと庭先に降りると、ヴィアーナは彼に抱きついた。少々癖のある、燃えるような赤い髪、秀麗な眉の下の鷹のように鋭い瞳。無愛想で滅多に微笑む事の無い唇。ヴィアーナは兄の全てが好きだった。

「ヴィアーナ。いい子にしていたか？」

「ええ、それはもう。いつものお兄様のヴィアーナよ。ところでお土産は？」

「こいつめ」

ハディールは微かに笑いながら妹の額を小突いた。ヴィアーナが軽やかな笑声を上げると、ハディールは懷から取り出しながら、妹に後ろを向くように促した。

「何かしら」

兄の手によりヴィアーナの首筋に掛けられた太めの銀の鎖の、白い胸元の中央にぶらさがる精緻な彫刻が施された小さな銀の板には、煌く紅玉が大小五つほど嵌め込まれていた。その見事さにヴィアーナは目を瞠る。うなじの髪を除けられ、金具を留められた。

「なんて綺麗」

紅玉はヴァリドゥー家を象徴する石である。ゆえにヴィアーナはいくつも所有していたが、これほど見事な石は持っていない。

「この世で最も紅玉が似合うのは我が妹をおいて他にはいまい。さあ見せてくれ」

催促されてヴィアーナは緊張しつつ伏し目がちに兄の方を振り向く。どうか、お兄様の期待を裏切りませんように。

「やはり。思った通りだ。それどころか、宝石の方が霞んでしまっ」

ハディールは鋭い瞳を和ませた。良かった。ほっとヴィアーナは心の中で胸を撫で下ろす。そして入れ替わるように、ヴィアーナの胸は弾んだ。兄を独占する時間が訪れたのだ。さて、これから兄と何をしようか。チェスカ、お人形遊びか、それとも観劇に連れて行って貰おうか。兄は屋敷の外へ出る事をあまり許可してくれないけ

れども。

「お前は私のおき紅玉だ」

ヴィアーナがあれやこれや考えていたその時、ふいにハディールから指先でそつと顎を持ち上げられた。彼の真摯な瞳と目が合う。

「お兄様……」

ヴィアーナはこんな時の兄の瞳が苦手だった。どうして良いのか、分からない。正視が耐えられず、視線をあちらこちらに泳がせてしまう。息が苦しくなる。

「どうして、そんな瞳を……」

動揺しつつ問うと、兄は無言で顔を近づけて来た。

「あ……だ、め」

動けない。唇が、触れ合う。何だろう、どうして兄は最近、私にこんな事をするのだろう。

「あふ……」

兄の舌が入り込んで来ると、ヴィアーナは全身がかつと熱くなるのを感じた。今日の口接合は、何だか違う。危険だ。そう思うが抵抗出来ない。口の中を蹂躪されるうちに、痺れる様な心地良さと共にヴィアーナの奥処が妖しい反応を示し始めた。唇だけでは無く、更なる何かを求めているような反応。けれどその行為をヴィアーナはまだ知らない。友達が集まって、密やかな話をした際に耳にした

ばかりだ。

「んん……ん……っ」

堪らず、ヴィアーナは兄の衣を掴んだ。ハディールはまるでそんな妹の反応を面白がっているように、くずおれそうになる彼女の腰を支えつつ、執拗に舌を絡めた。甘やかに、弄ぶように。

「んんふう……っ」

もう、やめてやめてお兄様。心の中でヴィアーナは哀願する。

「……感じているのか？」

唇を離し、ハディールは妹の泣きそうな瞳を見つめて薄く笑んだ。

「お……兄様の……意地悪……」

「堪らない」

もう限界かも知れない、とハディールが物憂げに呟いたその時。

「ヴィアーナ、どうしたの？ さっき声がしたようだったけれど」

屋敷の奥から声がした。ヴィアーナ達の母の声だ。

「私です。ただいま帰りました母上」

ハディールは妹を抱いたまま何事も無かったかのような口調で屋敷の奥に声を掛ける。

「おお、お帰りハディール。ヴィアーナもそこにいるのでしょうか？
二人とも、中へ入って来なさい」

「だそうだ。歩けるか妹殿」

ハディールはからかうように妹の耳元に囁く。

「平気よ」

うなだれたヴィアーナは小さく返答した。

「今のは、お前をからかったただけだ」

「お兄様！？」

ヴィアーナの顔がさっと青ざめる。

「うぶだな」

くつくつと肩を揺らし、彼は笑った。兄は一体全体、私をどうしたいのだろう。

「済まなかった」

ハディールは宥めるように妹の肩を優しく叩き、やがて兄と妹は寄り添いながら屋敷の中へ入った。

虹色の客人

あくる日の昼下がり。ヴァリドゥー家に来客があった。ヴァール・ドゥナ・ガーシュ　古い言葉で竜の治める国と言う意味らしい。きつての名門貴族、ヴァリドゥー家と比肩する家格のロンドデル家の双子の姉妹だ。二人ともヴィアーナとは旧知の間柄で、訪れたのはもちろんヴィアーナと時を過ごすのが目的であった。

落ち着いた赤い色を基調としたタイルが張られた壁の、赤銅色の獅子の口から水が流れる光射すテラスに二人を招き入れ、ヴィアーナは窓の外を眺める。そこにはヴィアーナの着ているドレスと同じ色の、赤い薔薇の海が広がっていた。

ヴィアーナは昨日のこの庭での出来事を思い出す。

兄がたまにしてくる、ついばむような接吻は、少々行き過ぎだが愛情表現の一種だと思っていた。けれど昨日、兄がしたあの接吻は。

まるで恋人同士がする接吻の様ではないか。

ヴィアーナの心は揺れる。真摯な兄の瞳。からかっただけ。どちらが本当なのか。

否。本気なわけが無いのだ。なぜなら、兄だから。兄が妹に恋心など抱くはずが無いではないか。

（　　）　　やっぱりお兄様ったら、ひどいわ。接吻と言うのは、相思相愛の殿方とするものなのよ。それを……！）

「ヴィアーナ、どうしたの？ 考えごと？」

「あ、いいえ」

友人が訪れていた事を忘れていた。ヴィアーナは窓から離れてすでに友人が腰掛けるテーブルの方へ歩み寄り、向かいの椅子へ腰掛けた。

ロンドデリルの双子の姉の方をユラン、妹の方をミランと言った。ヴィアーナと同年だ。二人とも、象牙の肌に虹色の瞳にゆるやかにうねる白く輝く髪をしていて、七色に光る小さな貝殻で出来たスパンコールが無数に付いた純白のドレスを着ている。双子だけあって二人ともよく似ており、一見するとどちらが姉でどちらが妹なのか分からない。

しかし彼女達と長年付き合っているヴィアーナには独自の見分け方があり、二人を間違える事は無かった。彼女達には言えないが、より目つきが悪い方がミランなのだ。彼女達はいわゆる不良と言う奴で、親に黙って市街地へ出かけては流行を先取りしていた。今日も双子はそれぞれ流行りの絵師に描かせた象牙の扇子をわざわざ広げてヴィアーナに見せ付けるように傍らに置いている。いつも彼女らには遅れを取り、齒がゆく思うヴィアーナであったが、双子は別にヴィアーナに一步先んじるつもりなど無く、毎度悪い遊びに誘ってくれるのだ。兄が怖ろしくていつも断っているのはヴィアーナの方なので仕方が無い。

「ヴィアーナ。今日はね、この本を貴方に薦めに来たのよ」

にやにやししながら双子が背後から差し出した本には『甘い果実』と題字が書かれていた。向かい合う男女の絵が描かれている。

「なあにこれ」

「何て言うか……ねえ」

双子は顔を見合わせて笑みを深める。本当に、心から通じ合っている風なむつまじい彼女達であった。

「とにかく凄いのよ。描写が……」

とユラン。

「描写？」

「行為の」

とミラン。

「行為の……」

ヴィアーナはよく意味が解らぬままに彼女達の言葉を繰り返した。接吻の描写が凄い本なのだろうか。

貴方がまだ知らない行為よ、とミランに言われ、少々不快に思いヴィアーナは鼻息を漏らした。いつもこうだ。この双子は自分よりも色々な事を知っているから私を馬鹿にする。

「接吻くらいなら知っているわよ」

ヴィアーナの意外な言葉に、ユランが愕然した表情をした。手に

していた茶器を取り落としそうになる。

「お兄様に大切にされ過ぎている貴方だから、そんな事全然知らないと思ってたわ　どこで？　誰と？」

「誰と出会うつて言うの？　婚約者でもいるの？　社交界に出ていない貴方が接吻するつて言ったら　」

双子はテーブルに身を乗り出してヴィアーナに畳み掛けた。

社交界、と言う言葉がヴィアーナの胸を切なくさせた。ヴィアーナのまだ知らぬ世界である。

ヴィアーナの曇った表情を読み取り、ミランがはつと失言に気付く。

「ごめんなさい」

謝罪にヴィアーナは気にしないでと弱々しく首を振る。

そうなのだ。目の前の双子はもうすでに大人の婦人と認められ、城で行われる舞踏会に顔を出したりしている。しかしヴィアーナはまだだった。母や兄がそれを許さないのだ。魔法王国きつての名家であると言うのにヴィアーナにはなんと魔法が使えない。始祖が大いなる魔力を有していても、代を重ねるごとに魔法を思う様に使えなくなる事もあるらしいのだが　反対に強大な力を制御出来ずに持て余す場合もあり、そのような者は国王が設立した魔術の学院で修練を積む事になる　しかしそれだけでは無い。兄が言うには、所作が貴族の娘としては優雅さに欠けると。母が言うには、嫁に出すには刺繍や歌がまだまだ合格点にはほど遠いと。

「私、貴方達と違って魔法も使えないし、お行儀もまだまだだから……早くお兄様やお母様の許可が降りる様に、もっと頑張らなくちゃいけないわ」

駄目だ。どうしても声が沈んでしまふ。二人に対する憧れと嫉妬、劣等感が増していく。

「そうよ。くよくよせずに、元気を出して。私達の赤い薔薇」

ユランの励ましにヴィアーナは心からの微笑を浮かべた。良い友人達だ。

「お城の話を聞かせてよ」

ヴィアーナは居住まいを正しつつ切り出す。話題を変えるのに好都合だ。何と言っても接吻の相手は兄だったのだから、問い詰められても困る。

「お城の……そうねえ」

双子は視線をめぐらせながら共に考える。白い睫毛の中の、夢そのものが凝縮された玉の様な虹色の瞳。ヴァリドゥー家の始祖は炎を操る真紅の鷹であり、真紅の鷹は家紋にもなっているが、ロンドデリル家の始祖は百色の迷夢と言われ、その始祖の姿の詳細は公表されていない。

「あ、そうだ。魔法はね、国王陛下だって使えないのよ」

とミラン。ヴィアーナには初耳だった。

「初めて聞いたわ。そんなんで大丈夫なのかしら、この国は」

一貴族の娘である自分ならともかく、魔法王国の頂点に立つ者が。

「陛下にはモスリー卿がいるから大丈夫よ」

ユラン。

「モスリー卿？」

「このヴァール・ドゥナ・ガーシュの空を魔法で素敵なか色に変えている、宮廷魔術師を務められている魔導卿よ」

ユランに続きミラン共にその声にはうつとりした響きがあった。ヴィアーナは想像する。美意識の高い双子の事だ。きっとその魔導卿は素敵なか方なのだろうと。

「紫水晶の瞳をしたとても美しい殿方よ。優雅な物腰で、誰にでも同じ優しい眼差しを注いでくれるの。彼に迫る女性は多いわ。だけど彼、女性には興味が無いみたいで、彼女たちの愛の言葉を飄々と受け流して、孤高を保って難しい書物ばかり読んでいるそうよ」

「あらユラン。他人事みたいに言うけれど、貴方も受け流された一人じゃないの？」

焼き菓子を頬張りながらミランがくぐもった声で言う。

「言わないでよ。あの時は人が通ったからよ。とにかく、彼は魔術の学院の卒業生で、学院始まって以来のとても優秀なか方だそうよ。

誰があの方の心を射止めるのか興味があるわ」

和氣藹々と話す双子達の向かいで、ヴィアーナの真紅の瞳が俄かに潤み始めた。唇がへの字になる。

やつぱり、聞くんじゃ無かった。一足先に自分の知らない世界を知った双子が羨ましくてしょうがない。

その時、青い空から真紅の薔薇の花びらのめくるめく雨が降って来て、気付いた双子が歓声を上げた。

風が揺れて、ヴィアーナは振り返る。いつの間にやら椅子の後ろにヴァリドゥー家の当主が立っていた。

「お嬢さん方。妹を虐めないでやってくれませんか。貴方がたと違い、妹はまだ色々と幼い部分がありまして。修行中なのですよ」

双子はたちまち白い頬を紅潮させ、どちらも素敵と零した。

双子と兄が語らっている隙に、何となくヴィアーナは急いでそうしなければいけない気がして、双子から受け取った本を背に隠した。

禁断の本

ロンドデリルの双子が訪れたその夜。

調度やカーテン等、全てにおいて赤を基調とした部屋の中、ヴィアーナは赤い色の薄い生地の子着に着替え、その上から真紅のガウンを羽織り、寝台の上に寝そべって彼女らから借りた本を広げている。食事と入浴を終え、後は寝るだけのくつろぎの時間である。

『甘い果実』と言う題のその本は、男女の恋物語を題材とした小説であった。

親に決められた相手との結婚が間近に迫っている貴族の娘メロリアンの前に、突然現れた野性味を帯びた謎の青年アドルが迫り、主人公の心は揺れる。しかし主人公の婚約者であるダトリール男爵も情熱的な愛を彼女に注ぎ、優柔不断な主人公は二人の男の間を右往左往して頭を悩ませると言う、兄ハディールから社交界はおるか、屋敷の外にすまなかなか出して貰えないヴィアーナには少し羨ましい話であった。

しかしそれはそれ、これはこれ。ヴィアーナはすっかりこの危険な物語にのめり込んでしまっていた。

謎の青年アドルは二ページ目にして主人公メロリアンに荒々しく接吻し、三百ページはある小説の五十ページ目にしてメロリアンの屋敷の窓から侵入し、彼女をまだ完全に説き伏せていないまま寝台に押し倒した。

「あいぶ……って何かしら。所々分からない単語があるわ」

後で棚から辞書を持って来て調べよう。とりあえず今は読み進みたい。ヴィアーナは一体彼女はどんなってしまうのか緊張し、ごくりと唾を飲み込んだ。しかし、小説なのだ。接吻は書いてもそれ以上の事は詳細に書くまい。

果たして、たかを括って次のページを捲ったヴィーアナの目に飛び込んで来たものは。

「こ、これは……」

ヴィアーナは突然目に飛び込んで来た衝撃的な挿絵に大きく目を見開いた。四つん這いになったメロリアンがアドルに後ろから貫かれているではないか。何と言う事だ。

（メロリアン、貴方どうかしてるわよ！ 慎みは？ 貴族の娘としての誇りはどうしたの！？）

思わず心の中でヴィアーナは叫ぶ。そんなはしたない体勢で、アドルに何をどうされていると言うの！？

挿絵には二人が繋がった局部の詳細はさすがに描かれていなかった。なのでヴィアーナは余計にもやもやした。

男女の営みの概要くらいはヴィーアナもすでに知っていた。つい最近の事、家庭教師がヴィアーナに生物学的な知識として書物を携えその行為について教えたのである。しかしそれは絵による解説などの無い文面によるものであり、ヴィアーナの頭の中でその行為が絵的に展開する事はなかった。その夜、いつものようにヴィアーナは母と兄に今日は先生からこんな事を習いましたと食卓で話した。

ヴィアーナの母は青ざめ、ハディールは無言であつたが彼の目の前にあつた前菜と皿は瞬時に灰となつた。翌日、家庭教師は解雇され、再びヴァリドゥー家へ訪れる事は無かつた。ヴィアーナが兄ハディールと領地の牧場に訪れた際に、たまたま馬の種付けが行われていた時などは、たちまちハディールがヴィアーナを衣に匿つてその光景を彼女に見せなかつたが、少し前にロンドデリルの双子がしていた密やかな話を耳に挟んだ事によつて頭の中に絵が現れより具体的になつたのだ。おしべとめしべ、庭に訪れる鳥達の交尾を人に当てはめるくらいには。

（愛の行為は、身体を重ねるだけではないのね）

解らない単語が気になる。メロリアンはどうして喘いでいるのか。彼女をさんざん泣かせながら愛の言葉を囁くアドルは言動が裏腹な暴漢のようにも思える。

（何がどうなっているのか知りたいわ！　こんな単語、初めてよ。私、本当に勉強が足りないわね）

未知の情報が怒涛のごとく頭の中に押し寄せて来たために目を回しながらヴィアーナは本を伏せ、寝台を降りてスリッパを履き、部屋の隅にある書棚へと向かつた。兄の部屋の本棚に比べると書物の量が圧倒的に本当に少ないが、辞書くらいはある。

ヴィアーナが重い辞書を手に取つたその時。

「ほう。夜中まで辞書を出して勉強とは感心だな。我が妹殿は」

ノックも無く入って来たのはハディールだった。夜更けだが、彼はまだ夜着にも着替えていない。いつも深夜まで魔法の勉強にいそ

しんでいる彼であつた。

「お兄様っ」

振り向いたヴィアーナは口から心臓が飛び出そうになり、辞書を取り落とした。幸い足の上には落ちなかった。

「どうした。そんなに驚いて」

ハディールは部屋の中へ進みながら寝台の上に伏せられていた本に目を止め、好奇心に目を輝かせる。

「何だ？ 何の本を読んでいる？」

「駄目っ！ それは」

慌ててなりふり構わずヴィアーナは止めに入ろうと寝台へ駆け寄ったがハディールの手の方が早かった。ハディールが本を手取るよりもよつて、裸の挿絵　その体勢は後背位と言つらしいがあるページを。

「　一体何の勉強をしている」

たつた今まで彼にしては上機嫌であつた表情が俄かに厳しいものとなる。ヴィアーナの顔は蒼白になった。

（どう言い訳すればいいの。難度が高すぎるわよ！）

「そ、それは……」

この挿絵に一体どの様な注釈を付ければ兄は納得してくれるだろうか。どう考えた所で良い言い訳が見つからない。

「まさかお前がこんな本を読んでいたとは」

嘆かわしい、と言いたげにハディールは嘆息する。本は片手で開かれたままだ。もう閉じて、本を閉じてよお兄様とヴィアーナは心の中で叫び続ける。ヴィアーナの心臓はばくばくしていた。

「真面目な本よ。ふ、服を描くのを忘れてたんじゃないかしら」

ふ、とハディールは妹の発言を一笑に付す。

「随分と杜撰な本だな。ヴァリドゥー家の者が読むような本ではなからう。ただちに処分する」

兄が炎の魔法を発動させる予感がし、ヴィアーナは慌てて止めにかかった。

「駄目っ！ お兄様、それは借り物なの！」

ハディールは本を持った手を掲げた。ヴィアーナは本を取り返そうと手を伸ばし幾度も飛び上がるが、彼女よりもはるかに背の高いハディールだ。まるで届かない。

「返してっ、お兄様お願いっ」

「双子だな。悪い友達だ。だが悪いのは彼女達だけじゃない。淑女は知ろうとせずに本を閉じるべきだ。失望したぞヴィアーナ……」

厳しい顔付きで必死な様子の彼女を見下ろしていたハディールは、ふいに片方の手でヴィアーナを真紅の絹が光沢の波を作る寝台へと押し倒した。ヴィアーナの小さな悲鳴が上がる。

「何するのお兄様っ」

両の手首をハディールに押さえ付けられ、覆いかぶさって来た彼が作る影の中でヴィアーナは喚く。

「お前もこの本の様な事をされたいのか？ ん？」

弄つような口ぶりでハディールは妹に問う。低く、妹にはどこまでも優しい声で。

「な、何を言つて……」

蒼白だったヴィアーナの頬が瞬時に朱に染まった。

動揺が隠せない。どうすれば良い、ヴィアーナ。文字を読むのが異常なほど早い兄だ。挿絵だけで無く、文章も数十行は読んでいるはずである。何とかそこに抜け道を見出すのだ。ヴィアーナは兄から目を反らしてまずはその鋭い瞳から逃れた。

「読めない単語が多くて……服を描き忘れたこの本に出てくる彼らが何をしているのか、よく解らなかつたわ」

これで大丈夫だろうか。視界の隅で兄の視線を確認する。だが依然として鋭い。

「どんどん私の知っているヴィアーナじゃなくなっていくな」

ハディールはさもがっかりした様に端正な口元に薄く淋しげな微笑を浮かべた。

兄を裏切ってしまった様で、ヴィアーナの胸が切なくなる。

「よ、読めるものもあつたけど、意味は解らなかつたわ」

「どんな言葉だ？」

「あい、ぶとか」

「いつも私がお前にしている事じゃないか」

「え？」

ハディールは片方の手でヴィアーナの白い額に触れると真紅の髪の中へと指を沈み込ませ、そのままゆるやかに流れる毛先までを優しく梳く。ヴィアーナはうっとりとして目を閉じた。兄からこうされるのは、好きだ。

「これも愛撫だ」

説明しながらハディールはヴィアーナに唇を近づける。その寸前、ヴィアーナは気配に気付き目を開けた。

「だ、駄目っ」

ヴィアーナは反射的に接近して来る兄の胸を両手で押しのけた。こう言う事は、恋人とするものなのだ。いくら兄の事が好きでも。

「お兄様、もう悪ふざけはやめてよねっ」

ハディールは不意打ちを食らったように呆然と目を見開いた。

「それにつ、いくらヴァリドゥー家の当主と言っても、ノックをしないで淑女の部屋に入ってくるのは失礼よっ」

立て続けに兄に訴えるヴィアーナの目に涙が滲んだ。自分はもう子供では無いのだ。男女の接吻は重んじられるべき行為だと言う事くらい解っている。冗談では済まないのだ。

しかし、そんな妹の訴えをよそに、ハディールの視線が別のところに集中している事にヴィアーナは気付かなかった。兄を近付けまいと両腕を身体の前で突っ張っているために、ヴィアーナの小さな胸は寄せられ、その中心の色付いた部分は薄い夜着に透け、二つの突起は生地をほんのりと押し上げている。

ハディールの唇は微かな声を発した様に僅かに開かれていた。

「それは、済まなかった」

ハディールは幾分が気落ちした様子で身体を起こすと、本を取り返そうとヴィアーナが手を伸ばすのを阻止しつつ寝台から降りた。

「淑女としての自覚が芽生えつつあるのは良い事だ。私もそろそろお前への接し方を改めなければいけないな」

「新しい扇子を買ってくれたら、昨日の事は許してあげるわよ」

ヴィアーナは勢い良く起き上がって兄の背に言い放った。ついでだからねだってみよう。昼間、ロンドデルルの双子が持っていた様な扇子を。

「あれはやり過ぎだが、こんな悪書を読み耽っていたお前だ。反省させる為にも百貨店へ行くのはしばらくお預けだ」

「そんな!」

ヴィアーナは激しく後悔した。が、時すでに遅し。しまった。兄が確実に眠っていると思われる時刻に読めばよかった。

ヴィアーナの唇がへ字になったその時。

まるで悲鳴のような声が聴こえた。ヴィアーナ、ヴィアーナ、私の娘、どこにいるの? と、屋敷中に響く声で。

「母上か」

言いながら、ハディールは部屋の扉へ向かい、扉を開けて廊下に耳を澄ました。

「またうなされている様だ。ヴィアーナ。早く行ってやれ」

ヴィアーナは兄に頷いて寝台から飛び降りた。ヴィアーナの母は時々、夜にうなされる事があった。そのような時はヴィアーナが彼女の側へ行き、一緒に眠るのがヴァリドゥー家の決まりである。

「行って来ます」

ヴィアーナが駆け足で部屋の外へ出る際、扉を開けていたハディールは自分の脇を通り過ぎる妹の髪を愛おしげにそつと撫でた。

漆黒の青年

翌朝。朝食前にヴィアーナは母の臥所から抜け出し、真紅の夜着にガウンの姿で庭に出て薔薇の世話をしていた。空は薄い紅に染まっていた。

昨晩うなされていたヴィアーナの母は、娘が来て手を握ると大いに安心して寝息を立てた。そんな事はたまにあり、ヴィアーナの母、ヴァリドゥー夫人は何か過去の思い出を引きずっているようでもあったが、娘には一切その事を話さなかった。

ヴィアーナが蹲って花壇で育てている薔薇の花びらの剪定をしていたその時、ヴィアーナの視界の隅で人影がよぎった。人影の方を振り仰ぐ。兄だ。

紅玉で出来た水盤には葡萄酒が満ち、真紅の薔薇の咲き乱れる庭に、燃える様な赤い髪、血の様に赤い外套を身に纏った類稀なる美貌の青年、真紅の貴公子ことヴァリドゥー家の当主、ハディールが佇んでいた。空を仰いでいる。おそらく地上へ出立するのだろう。

ヴィアーナはしばし兄の姿とその横顔に見惚れた。こんな夢の様な青年が自分の兄だなんて。

「お兄様……」

ぼつりとヴィアーナが呟くと、気付いてハディールは声の方を向いた。炎の気性を宿す彼の真紅の瞳は妹を認識するとたちまち和む。

「もつご出立？」

朝食もまだなのに。ヴィアーナが薔薇の剪定を止めて立ち上がる
うとしたその際、指先に鋭い痛みが走った。

「あっ」

棘に刺さった様だ。確認すると、小さな真紅の玉が指先で膨れて
いた。

「大丈夫か？」

案じながらハディールが歩み寄って来た。ヴィアーナは頷きなが
ら立ち上がる。しかし思いの他深く刺してしまった様で、涙が滲ん
でしまう。兄に見られたくない。

ハディールは目の前の負傷した手を胸に抱いてうつむいたヴィア
ーナの顎を上げて潤んだ瞳を確認した。

「泣き虫め」

次に傷付いた妹の手をそっと手に取ると、自身の唇に押し当て、
やがて啜えた。

「っ」

ヴィアーナは兄の唇と舌の感触に身体をびくりと震わせた。同時
に視線を反らす。どうしてそんなに見つめるのか。居たたまれずに
指を兄の唇から引き離そうとするが、力強い兄の手は全く解放して
くれない。

「うう……っ」

まただ。またあの妖しい感触。兄から深く接吻された時と同じ様に、身体の奥が疼く。

「お兄様、また私をからかつ」

動転したヴィアーナが兄に喚こうとしたその時、指先が漸く解放された。

「泣き虫のお前だ。あの時もさんざん泣くんだらうな」

「あの時つって」

はっ、とヴィアーナは昨日、兄に没収された本の内容を思い出す。ヴィアーナはもはや兄の言葉の意味が薄々とわかる様になっていた。

ハディールは妹の表情の変化を読み取る様に真紅の瞳を鋭くした。

「やっぱり、お前にはお仕置きが必要だな」

不吉な言葉を残し、ハディールは赤煉瓦の塀の方へ向かった。塀の前まで来て地面を蹴った直後、彼は巨大な真紅の鷹に変化し、翼を広げてそのまま空へと飛び立った。

さて。兄に没収された借り物の本を何とかしなければなるまい。

真紅のドレスに着替え、朝食を終えたヴィアーナは自室のソファ

に腰掛けあれこれと思考をめぐらせた。本来は勉強に当てられる時間であるが、家庭教師が兄に突然解雇された為に、ヴィアーナは気ままな時間を過ごしていた。

双子から借りた例の小説を、ヴィアーナはまだ五十ページ程しか読んでいなかった。あと数百ページ未読だ。小説の主人公メロリアンと謎の青年アドル、そして主人公の婚約者ダトリール男爵はどうなるのか。最終的にメロリアンは誰を選ぶのか。何としても続きが読みたい。

しかしハディールの部屋には鍵が掛けられている。魔法の研究などに使う薬品があり、よく何があるのかと面白がって勝手に侵入していたヴィアーナの身を彼が案じた為である。

「うーん……」

使用人に書店へあの本を買いに行かせるのはどうだろう。いや、書店くらいなら自分でも行けるのではないか？ 屋敷からそれほど離れていないはずだ。

（この自由な時間も、次の家庭教師が来れば終わってしまうわ）

それならば。ロンドデリルの双子の様な真似は出来ないが、一人で近所の書店へ行くくらいなら。

「決めた！ 書店へ行くわ。そしてあの本を買って続きを読むの」

決断し、ヴィアーナは立ち上がった。何と言う名案だろう。心躍る。そうと決まればこうしてはいられない。まずは今着ている真紅のドレスを脱がなければ。外歩きには向いていまい。馬車を出すの

には母か兄の許可が必要だから、それは出来ないのだ。

ヴィアーナはドレスを脱いでクローゼットの扉を開く。しかし赤いドレスしかない。出鼻をくじかれ、ヴィアーナは吐息を漏らす。そして扉の裏に貼られた小さな鏡に映った自分を見て再び嘆息する。

ヴィアーナは鏡を見て思う。この髪と目。どんなに市井の娘のような身なりをしても、この赤はヴァリドゥー家の人間の特徴であり、この姿で道を歩くのはお忍び中のヴァリドゥー家の人間ですと言って回るようなものだ。どうにかしなければ。

「そうだわ。誰か魔法が使える者がいたような……」

（馬丁のキール。あの人少し魔法が使えたはずだわ）

私のおこずかいを彼に渡して服と髪と目の色を変えて貰おう。それがいい。そうしよう。ヴィアーナはクローゼットの中から比較的裾の広がらぬ、装飾の地味なものを選んでそれを着た。

母との昼食を終え、難色を示す馬丁のキールに無理やり口止め料兼手間賃を渡し、髪をこの世界におけるごく一般的な色である金色、瞳を緑、そして地味なドレスをこげ茶色に変えてもらったヴィアーナは、まんまと屋敷の外へ出るとレースの白い日傘 宮廷魔術師が闇一色であった空の色を変える様になって婦人達の間で流行り始めたのだ を差し^{エクスラド}て緑石の街路樹の路を歩いた。

開放的な気分にヴィアーナの足取りは軽くなる。私は今、貴族の娘でも何でも無い、ヴァール・ドウナ・ガーシュのごく普通の娘。

馬丁に施されたこの魔法はそれほど持たないと言う事なので、書店で本を購入したらすぐに屋敷に帰らなければならないが、それでも

馬車が行き交う目抜き通りに出たヴィアーナは辺りの建築物を見回しながら歩く。書店は市街地の目抜き通り沿いにあつたはずだ。確か百貨店の並びの近く。いつもはヴァリドゥー家の炎のたてがみを持った馬が引く四頭立ての馬車を止めるあの場所の近くだ。

「あつ、見つけた」

開いた書物の形をした大きな看板が目に入り、ヴィアーナはその白い壁に葡萄と蔓の浮彫の施された重厚な建物の中へ入った。

ヴァール・ドゥナ・ガーシュで一番大きな書店、『リントス』の中に入ったヴィアーナは、日傘を畳むと入り口で足を止め、まずは整然と並んだ書架の群れを見渡した。立ち読み客も多い。

（あの本は一体どこにあるのかしら）

緑色のお仕着せを着た男性店員が通りかかり、ヴィアーナは彼を呼び止めた。

「本を探してくださる？」

「どういった本でございましょう。題名、または作者名などはご存知ですか？」

「『甘い果実』と言う題名の小説よ」

静かな店内に響いてしまったヴィアーナの声に、立ち読み客が本

から顔を上げる。ヴィアーナは頬を染め口元を覆った。本の清算が済んだら即刻退散だ。

書店から出て、本の入った袋を携えたヴィアーナは帰路に着いた。しかし、書店はヴィアーナの屋敷からほど近いはずだと言うのに、一向にたどり着かない。ヴィアーナの心に不安が押し寄せる。まさか道に迷ってしまったのでは。

そんな折、雲行きが怪しくなった空からぽつりぽつりと雨が降って来た。日傘を叩く雨音に、ヴィアーナは空を見上げる。

「何て事なの」

次第に雨足はひどくなり、気付けば水に浸された街路の上で水がはね踊るほどになった。もはや日傘で防げるものではない。

「本が濡れてしまうじゃないの！」

本が濡れるのは時間の問題だ。急ぎどこかで雨宿りをしなければ。ヴィアーナは辺りを見渡し、目に入ったパン屋の軒下へ向かって駆けた。本は死守しているものの、ドレスはもはやびしょ濡れだ。

「雨なんて要らないわよ、宮廷魔術師さん！ いい迷惑だわ！」

空へ向かってヴィアーナが怒声を発したその時。

「ですが、砂埃の街路や建物の屋根はきれいになりますよ」

実にのんびりとした、歌うような声がして、ヴィアーナが振り向くと、いつからそこにいたのか、すぐ隣に髪も身に纏う外套も漆黒マント

の、実に高雅な顔立ちの美青年が立っていた。ヴィアーナと同じく雨を凌いでいるようだ。

「乗り合い馬車がここへ来ますので、良かったら家で雨宿りして行きませんか？　すぐ近くなのですよ」

「ええ、是非」

ヴィアーナは青年の誘いに一も二も無く飛び付いた。良かった。これで本が濡れなくて済む。

青年はヴィアーナへ向けてにこりと柔らかく微笑した。彼女の兄と同じくらいに丈高いその白皙の青年の、黒く長い睫毛の中の瞳は、アメジスト紫水晶の様であった。

青薔薇の屋敷

乗り合い馬車から降りたヴィアーナは街で出会った謎の青年の漆黒の外套マントに庇われて雨の中、彼に誘導されるまま街路を駆けた。

ヴィアーナは購入した本を抱き締めて走りつつ、青年の外套の中から雨雲で薄暗くなった街路を見渡す。ここはどこだろう。乗り合い馬車に乗っている時間はほんの僅かだった。道路は様々な色タイルで整地され、しつかりとした門構えの屋敷が並んでいるのを見ると、市街地のど真ん中に展開する高級住宅地なのだろうが、あまり外に出た事が無いヴィアーナにはほとんどと言って良いほど土地勘が無い。

ふとヴィアーナが青年を見上げると、彼は本で頭を庇っていた。ひよっとすると、買ったばかりの本なのではないのだろうか。自分だったら外套の中に入れて濡れるのを防ぐけれど。

「本が濡れてしまいましたわね」

「読めれば問題ありませんので」

即答に、彼は少し兄に似ているかもしれない、とヴィアーナは思った。年も兄と同じくらいであろう。

「もうすぐ着きます　あのぼろ家です」

青年が指差したのは高い塀に囲まれた豪壮な屋敷だった。

（家より立派じゃない！）

一瞬ヴィアーナは思った。しかし、屋敷に近づくにつれ、ヴィアーナの胸に不安が芽生え始めた。古い。

屋敷の塀には大きなひびが幾つも入っており、屋敷の門には無数の蔦が絡んでいて長い事手入れがされていない様子である。一見すると無人の屋敷だった。

「さあ中へ」

青年がヴィアーナを促しつつ黒い門を開けると身も世も無い女の悲鳴のような音がした。蝶番に油が長い事差されていないようだ。

扉が開くと屋敷の敷地から風に乗って鮮やかな青い色の花びらが街路に広がり、ヴィアーナの濡れた足元にも張り付いた。薔薇の花びらだった。屋敷の敷地には一面にびろうどのような深く青い薔薇の花びらが敷き詰められていた。

「青い薔薇……」

ヴィアーナは思わず呟いた。青がこんなにも深遠な色だったとは。

いつしか雨は止んでいた。しかし雲はまだ重く暗い。灰色の空の下、青年の後に続きヴィアーナは敷地の中へ入った。青い絨毯を踏みしめながら奥へと進むヴィアーナの目に入る何もかもが古色蒼然としていた。薔薇の蔦の這った円柱や石膏像の裸婦が庭のそこかしに佇み、水槽が干からびてひび割れた噴水はヴィアーナが通り過ぎると客人を歓迎する様に中央から青白い光を躍らせた。

「きれい」

噴水の前で思わずヴィアーナは立ち止まった。我が家の庭にもこんな仕掛けの噴水が欲しいものだ。

「それにしても荒れ放題のお庭ね」

残念だ。手入れすればもっと素敵になるだろうに。

「ここには私一人しかいないもので、庭にまでなかなか手が回らないのです」

青年は立ち止まりヴィアーナを振り返ってはははと笑いながら答える。

「一人？　こんな広いお屋敷に？　嘘でしょう」

規模から言えば大貴族や大富豪の邸宅並みではないか。一体この青年は何者なのだろう。

「いえ本当です。ここには滅多に帰りませんが　ちょっと荷物を取りに帰った所で貴方と会ったのです」

「別宅があると言っ事なのね」

「はあ、まあ、そのようなものがあります」

青年は曖昧に答えながら蔦の葉に覆われた建物の方へ歩き出す。ヴィアーナは駆け足で青年に追い付いた。

「別宅があるのに庭や屋敷の手入れをする者を雇えないの？」

見上げた先にある横顔にヴィアーナは恍惚となった。美神の彫刻の様だ。雨に濡れてその額に張り付いた黒髪が彼の凄絶な美貌を一層引き立てる。

「参りましたね。もうその辺で勘弁してください、お嬢さん」

青年は肩を竦めながら演技じみた弱った声で哀願した。別段本心から弱ってはいないようだ。食えなさそうな人物である。

「ヴィアーナですわ」

ヴィアーナは名を告げた。名前だけなら良いだろう。姓さえ教えなければ。

「貴方は？」

「これは失礼しました。モスリーと申します」

彼もまた姓では無く名だけ告げた。

「モスリー様……」

どこかで聞いた事のある名前だ、とヴィアーナは記憶の糸をたどるが、思い出せない。しまった。これほどの家ならば大抵は門のどこかに家紋が掲げてあるはずだ。確認すれば良かった。青い薔薇の美しさに気を取られていた。

（謎の青年はアドルで、メロリアンの婚約者はダトリール男爵……なら気のせいね。聞いた事の無い名だわ）

昨日と今日で未知の情報が頭の中に一気に押し寄せて来たせいで混乱しているのだろう。

モスリーの屋敷の応接間に通されたヴィアーナは、彼に待っている様に言われ、埃まみれのソファに腰掛けた。広い部屋の中を見渡してみる。漆喰の天井には美しい薔薇の彫刻が施されており、壁には手刷りと思われる青薔薇の意匠を用いた壁紙が貼られ、重厚な檜材の腰壁に囲まれた格調高い部屋であった。しかし先ほど見た庭と同様、大理石の暖炉も棚もテーブルも埃が堆積していてしばらく手入れされた形跡が無い。

ヴィアーナは暖炉の上の大鏡の手前に、小さな四角い金の額縁に収められた肖像画が乗っているのを見つけた。黒髪の若い女性が描かれている。あの青年、モスリーにどことなく面影が似ていた。彼の姉か妹だろうか。

ヴィアーナがぼんやりとそんな事を思っていたその時、戻ったモスリーが扉を開けて入って来た。漆黒の外套は脱いでいたが、やはり総身黒ずくめである。彼の手には紫色の女性ものの衣類がある。

「母のドレスがありましたんで、良かったら着替えてください。濡れていて気持ち悪いでしょう？」

「えっ」

善意を前面に押し出した様なにこやかな表情で差し出されたドレスを、ヴィアーナは躊躇しつつもソファから立ち上がり受け取った。

まさか下心はあるまい。

ヴィアーナがドレスを抱いてじつとモスリーの次の行動を見守る中、彼は華麗に踵を返し 乗り合い馬車からここへ来るまでの間に、ヴィアーナは彼の身のこなしが素晴らしく優雅である事に気付いていた かくしてヴィアーナは無事に少し胸の部分が余る紫色のドレスに着替え終えたのだった。再びノックしてモスリーが部屋へ入って来た時、彼が手にした盆の上には銀製の茶器があり、紅茶の葉が丁度開く頃合であった。

「ところでヴィアーナ。それは何の本なんですか？」

ヴィアーナの向かい、テーブルを挟んだソファーに掛けたモスリーは茶をすすりながら彼女の脇に置かれた本に目をやる。本には『リントス』の葡萄の意匠が入った紙製のブックカバーがかけられていた。

「えっ……あっ…その」

ふいに問われてヴィアーナは紅茶の入った器を零しそうになった。おっとりした雰囲気のもスリーだが、本に目をやる彼の眼光は兄並みに鋭い。

ええい、言ってもわかるまい、と思い、ヴィアーナは口を開く。

「『甘い果実』……と言う小説ですわ」

澄まして答える。

「ああ 聞いた事があります。今話題の女性向けのきわどい本で

すね」

気まずい沈黙が流れた。

「それにしても良い香りのお茶ですわね」

「湿気ていなかったので使いました。香りも飛んでいなかったようですね。良かった」

「ここにはどれくらいいらして無かったの？」

「さて……もう半年以上になりますかねえ。前回も本を取りに来ただけでしたが」

「そんなお茶を私に!？」

私はヴァール・ドーナきつての名門、ヴァリドゥー家の令嬢よ、と切り札的な台詞が口を突いて出そうになる。だが、彼がいなければ本も濡れていたし、濡れたドレスのまま家にも帰れずに街中をさまよって風邪をひいていたかもしれない。紅茶の事くらい我慢すべきであろう。

モスリーは申し訳無さそうに頭を掻いた。ヴィアーナは衝撃を受ける。男のものには違いないのだが、まるで豎琴を奏でる者のそれのように繊細な手だ。

「ごめんなさい。飲めれば問題ないわ」

居住まいを正し、ヴィアーナは再び紅茶を味わった。味わいながら推理する。

「わかった。貴方、何かを奏でる人ね？　豎琴とか」

少しでもだけたヴィアーナの問いに、モスリーは考える様に天井を仰ぎ見る。

「うーむ　まあ、幻を奏でる事はありませんが」

人差し指で天井を指し示し、楽団の指揮者の様に振りかざすと、彼はシャンドリアの光を赤青黄色と変化たり、何も無い天井から青い薔薇の雨を降らせた。

「このように」

指先を軽くふって元の状態に戻すとモスリーはヴィアーナに向けて微笑を浮かべた。

ヴィアーナは思わず笑んだ。彼は機知に富んだ人物のようだ。どこか得体の知れないその微笑に彼の謎は深まる一方である。同時に好奇心も。

「良いわね、魔法が使える人って。私、魔法が使えないのよ」

「ん？　貴方には魔法がかかっているようですが……それは自分でかけたものではなかったのですね」

ヴィアーナの頭を見ながら呑気にモスリーは言う。ヴィアーナは思わず頭髮を押さえた。そうだ。この髪、そして目。馬丁のキールに色を変えて貰ったけれど、キールの魔法はそれほど持たない。まさか。

馬丁のキールに金色に変えて貰ったヴィアーナの髪は、モスリーと時を過ごしている内にうつすらと赤を滲ませる様になっていた。瞳の緑色に至ってはもはや真紅である。

「さて。『どちら』が本当の貴方なんでしょう」

さして驚いた風も無く、モスリーは言う。

「面倒な魔法だ　赤が本当なら少し怖ろしい気もしますが」

のんびりとした声のにこやかなモスリーとは裏腹に、部屋に不穏な空気が満ちた。警戒されている、とヴィアーナは察した。

「き、金色、金色よ！　目は緑なの！」

ああ、私に魔法が使えたら！　このまま完全に真紅の髪と目に戻ればモスリーの警戒は本格的な物になるだろうし、帰り道も難儀しそうだ。頭を覆い目を閉じていたヴィアーナの手にふいに何かが触れた。氷の様に冷たい。

ヴィアーナが目を開けると、間近にテーブルから身を乗り出したモスリーの顔があつた。彼の神秘的な紫色の瞳に、刹那、ヴィアーナの魂は吸い込まれそうになった。自身の頭を覆うヴィアーナの手には彼の手が重ねられていた。

「何も聞きません。解りました。髪は金色ですね」

ゆっくりと、モスリーの手がヴィアーナの髪の上を滑る。赤に変じようとしていた髪は見る間に金色になった。

「目を閉じてください」

促され、ヴィアーナは目を閉じる。すると瞼の上に彼の指がそつと触れられた。本当に、冷たい手だ。

「瞳は緑　さあ、開けてください」

ヴィアーナが再び目を開けると、馬丁のキールにかけられた鮮やかな緑色の瞳が戻っていた。

「馬車の中でもずっと思っていたのですが、貴方は私の初恋の人にとっても良く似ている」

ヴィアーナの片頬に触れ、懐かしむ様にモスリーは言った。

「さわ……らない……で」

私に触れても良いのはお兄様だけ。ヴィアーナは手を撥ね退けようとすが、出来なかった。身が竦む。彼は魔力のある怖ろしい瞳をしている。

「これは失礼」

モスリーはさっと身を引いた。

「子供の頃の話です。どうかお気になさらず」

モスリーとすぐに視線を合わす事も出来ず、何やら居たたまれずにヴィアーナは窓の方に目をやった。いつの間にか空は晴れ、夕の

色に染まろうとしていた。

黒塗りの馬車

「大変！ もう帰らなくちゃ」

モスリーの屋敷の応接間で、ヴィアーナは夕暮れになりつつある窓の外を見て叫んだ。兄が帰って来る前に帰り着かねば、大変な事になる。

「では馬車を手配しましょう」

モスリーが椅子から立ち上がった時、窓の外で鳥の鳴き声がして彼もまた窓の外を見た。

二人が見守る中、窓の外のバルコニーに一羽のカラスが飛来して欄干に止まった。

ヴィアーナはほっと胸を撫で下ろす。一瞬兄かと思った。否、鳥は鳥でも兄が変化するのは鷹だ。カラスのような鳴き方はしない。

「丁度良いところへ」

モスリーはカラスの方へ歩み寄り、窓を開けた。バルコニーの欄干に止まっていたカラスは彼がバルコニーに歩み出るより早く羽をはためかせて彼の肩に飛び移った。

「ご主人様がなかなか戻らないので心配になって様子を見に来たんです」

カラスはモスリーに女の子の様な愛らしい声で語りかけた。

「来客がありまして」

モスリーがカラスに答える。

（カラスが喋ったわ）

ヴィアーナは部屋の中からモスリーと会話する肩の上のカラスを見て思った。

（人が変化しているのかしら。お兄様のように）

魔力甚大なる真紅の鷹が始祖であるヴァリドゥー家だが、代を経るごとに文明を築くのに最も適した形、つまり人の形に変容していき、始祖がかつて有していた魔力と本質のみを留めるようになった。これは魔法王国ヴァール・ドゥナ・ガーシュにおける全ての民に言える事である。ヴィアーナの兄ハディールの本来の姿も人の形である。ただし何も考えずに変化を行った場合、始祖の姿に近くなる。

「丁度良い。エリン、このお嬢さんをお送りしなければなりませんので馬車の手配を」

命じられたカラスはモスリーの肩の上で小さく跳ねて移動し、ヴィアーナの方を振り向く。

「エリン、エリン」

があがあとカラスは騒ぎ出し、羽をはためかせると部屋の中へ入り込んだ。

「きゃあ」

突然の事に驚き、ヴィアーナは後ろへよろけそうになったが辛うじて踏みとどまった。カラスがヴィアーナの真上を旋回している。羽を掠められたシャンデリアは小さく揺れていた。そのうち碎けて降り注ぐかもしれない。

「お、落し物しないでね。一体何なの」

ヴィアーナは頭を庇い、シャンデリアの真下からすこし離れた。しかしカラスは上空で円を描きつつヴィアーナを追って移動してくる。ヴィアーナは蹲ったどうすれば良いのか。

「やだもう、モスリー様、助けて」

ヴィアーナが助けを乞うと、彼はバルコニーで肩を竦めた。部屋の中へ向けて歩み出す。

「エリン、やめなさい。お嬢さんがびつくりしていますよ」

モスリーはカラスを仰ぎ見て言いながら、部屋の中へ入って来た。カラスの名はエリンと言うらしい。不思議な響きだ。ここヴァール・ドウナに無いような。

「だってだって初恋のエリンじゃない！ ご主人様、もう私の事なんてどうでもいいんでしょうね、いいんでしょうね」

「何を言っているんです。別人です。それよりも早くなさい。私の命令が聞けないのですか？」

あくまでも柔らかい口調だが、語尾にわずかに冴え冴えとしたものを宿して、モスリーはカラスに訊く。

「めめめ滅相も無いです、手配して参ります、まま参ります」

カラスは慌てたように窓から飛び出して行つた。

「うちのカラスがお騒がせしました。ヴィアーナ嬢」

モスリーがヴィアーナの所へ歩み寄つて来る。ヴィアーナは騒動によつて乱れた金髪を整えつつ安堵の吐息を漏らした。

「あのカラスは人が変化したものではないの？」

「ええ。ただのカラスです。私の世話をしてくれています」

カラスを飼育するなんて珍しいと思いつつも、ヴィアーナは口に出さなかつた。何となく解つてきた、この青年が。廃屋のようなこの屋敷と言ひ、かなり風変わりのようだ。

「初恋の人の名はエリンと言ふの？ カラスもみたいだったけど」

初恋の人の名を付けたと言ふ事なのだろうか。

「そうです。いやはや、お恥ずかしい。これ以上の詮索はご勘弁を」

モスリーは頭を掻きつつ照れている風を見せるが、彼の顔は依然として柔和な笑みを浮かべたままの鉄面皮だ。ヴィアーナは少し齒痒い気がした。カラスの事であんなにうるたえるんじゃないかった。目の前の青年には何かに動揺したり、顔色を変える事などあるのだ

ろうか。モスリーとは僅かな時間を過ごしたただだが、おそらく彼は普段からこうなのだ。恋をしたと言うのが不思議なくらいだ。

「モスリー様」

「様は不要です。私は貴方の事をヴィアーナと呼びたいのです」

風変わり、柔和な微笑の鉄面皮、そして少しずうずうしい男だ、と内心ヴィアーナは苦笑した。ずうずうしいのは何かしらの裏打ちがあるゆえの自信からくるものかもしれないが、目の前の自分がヴァール・ドウナきつての名門貴族、ヴァリドゥー家の令嬢だと知れば、どんなに富裕な者であっても、よしんば貴族であろうとも簡単に叶えられる事では無い。けれど今は市井の娘。

「ではモスリー。今日は本当にありがとう。本も濡れずに済んだし、ドレスを貸してくれたお陰で風邪をひかずに済んだわ」

「私のほうこそ。今日は貴方のようなお嬢さんと出会えて良かった。まさか雨がこんな楽しい時間を与えてくれようとは」

ヴィアーナも同感だった。そう言えば、雨が降った後は我が家の庭の薔薇がいきいきとしている。あれも雨のお陰だった。

「このドレスは洗濯してきつとお返しするわね」

つい、とモスリーは更に前に歩み出てヴィアーナの手を取った。相変わらず冷たい。触れるなど言ったのに、この男は。

モスリーは紫色の双眸でじっとヴィアーナの目を見つめた。

「ドレスはどうか、ご不快でなければ返さずに受け取ってください。ドレスもきつとその方が喜ぶでしょうから」

「えっ……いいの？ これはモスリーのお母様の物なんじゃ」

「母は私が子供の頃に亡くなりまして」

「貴方、天涯孤独と言っちゃつなのね」

「おっしゃる通りです。母のドレスを着た貴方を見た時、胸が熱くなりました」

低く美しい声は哀愁を帯びるものの、やはりその表情は少しも感情を表出しない。それよりも、彼の顔が徐々にヴィアーナに近付いて来るではないか。危機だ。

「ちょ、ちよつとモスリー！」

ヴィアーナは身を引こうとしたが、手を握られていて逃げるに逃れられず、顔を紅潮させ、ぎゅつと目を閉じる。身体が震える。

しかし、いつまで経ってもヴィアーナの唇に彼のそれが触れる事は無く、やがて、ふふ、と彼の笑う声が聞こえた。

「可愛いですね貴方。特にその唇」

ヴィアーナが目を開けると、モスリーの美貌がそこにあつた。優しい微笑はほんの少しだけ、心の奥からの感情を滲ませているようだ。

「またいつかお会い出来るといい　いえ、きっとそうなるでしょう」

モスリーはヴィアーナの手を解放すると、窓の方を振り向いた。

「エリンが帰って来ました。馬車が着いたようです。さあ外へ」

外はもはや夕闇に沈んでいた。布に包んで貰った濡れた衣服と購入した本を手にしたヴィアーナと漆黒の外套を羽織ったモスリー、そしてカラスのエリンが青薔薇の屋敷を出ると、薄闇の中、門の前にそれでもはつきりと解るほどの豪華絢爛な黒塗りの箱馬車が停まっていた。二頭立てで黒馬が引き、馬車の扉部分や車輪は金で装飾されている。

「何だかすごく豪華な馬車だけど……」

二頭立ての簡素な物だが、こんな見事な造りの馬車は我がヴァリドゥー家にも無い。本当に彼は一体何者なのだろう。

「自家用では無く、貸し馬車です」

補足しながら、モスリーは肩の上のカラスを軽く睨む。

「それにしても豪華ですね」

「これしか無かったんですう」

エリンが羽をばたつかせて言い訳する間、馬車の御者席から紫色

のお仕着せを着た御者が降りて来てドアを開き、緋色の絨毯の敷かれた折り畳み式の階段を引き出した。

ヴィアーナは馬車の方へ歩みながら、ふと足を止め、何気なく門の方を振り返った。そう言えばこの家の紋章を確認していなかった。

屋敷の門にささやかに掲げられた盾形の紋章に描かれていたのは、一輪の青薔薇を意匠化したものであった。貴族の娘の必須的な知識として名家の家紋は覚えさせられたヴィアーナであるが、このような紋章は見た事が無い。

「さあヴィアーナ」

モスリーから背に手を添えられ、促されてヴィアーナは馬車の中へ進んだ。

やがて二人と一羽が馬車に乗り込むと、階段が収納され、おもむろに扉が閉められた。

「行き先は？」

「ええっと」

ヴィアーナは考える。ヴァリドゥー家の前で馬車を止めてはモスリーに自分の身元がばれてしまう。モスリーは悪人ではなさそうだからそれでも良いのだが、騙したようで後味が悪い。それに、兄がもし帰っていれば親切にしてくれたモスリーにも迷惑がかかるかもしれない。

「七番街の　そうねレアン公園まで」

ラドレ公園はヴァリドゥー家の近所であり、屋敷まで歩いて数分の距離である。

「解りました。レアン公園までお願いします」

モスリーが背後の小窓から御者に行き先を伝えたと、やがて馬車は走り出した。

馬車の中、心地の良い緋色のびろろ張りの椅子に腰掛けたヴィアーナは、向かいの席に長い脚を組んで腰掛けるモスリーから視線を外す為にカーテンを開けて窓の外を見た。

橙色の街灯の点る薄暗い窓の外、街路を花火を散らす派手な馬車や人が行き交う中、物凄い速さで疾駆する光り輝く馬が横切った。それから何頭も、何頭も後に続いてゆく。赤い毛色のその馬は炎のたてがみを持っており、乗り手は赤のお仕着せを着て、片手に松明を持っていた。

「一目瞭然、あの馬はヴァリドゥー家ですね、ご主人様。何だか物々しい様子ですけど、何があったんでしょうねっねっ」

モスリーの肩からカラスも窓の外を覗き見て零す。

ヴィアーナと言えば、窓の外を見たまま、思考が停止して硬直していた。

（……お兄様だわ。もう帰っていらっしやっただわ）

恐怖のあまり、ヴィアーナの唇に薄ら笑いが込み上げてきた。あ

の馬の群れは自分の搜索隊に違いない。それ相応の覚悟をして帰宅しなければなるまい。

「どうしました？ ヴィアーナ」

弄うような紫の瞳と目が合う。ヴィアーナの内面を見透かすような。もしかすると、この青年はヴィアーナの正体を知っているのかもしれない。

「いい、え、何でも」

「もうすぐ着きますよ。公園」

レアン公園の入口に馬車を停車めて貰うと、ヴィアーナは荷物を手に馬車から降りた。空にはすでに明るい星が出ている。

「今日は本当にありがとう」

ヴィアーナは振り返り、馬車を降りたモスリーに再び礼を述べた。

「そんな事をしている場合ですか。さあ、早く帰らないと、門限はとつくに過ぎているのでしょうか？」

「え、ええ。そうなの。家の者が厳しくて」

ヴィアーナがぎこちなく答えると、ふいにモスリーは一步前に進み出た。先刻の事もあり、ヴィアーナは思わず身構える。

モスリーはさっと華麗な仕草でヴィアーナの目の前の空間を撫でた。

「護身に妖魔を付けておきました。家に入ればその家の持つ結界の力により消滅する程度のものなので心配要りません。家にたどり着くまでに貴方の身に何かあればすぐに私に知らせが届くと言っただけの事」

「あ、ありがとう」

「お兄様によろしく、と言いたい所ですが、やはり私の事は伏せておくのが良いでしょうね」

声を低めて言うと、モスリーは身を翻し、馬車に乗り込む。

「それでは可愛いヴィアーナ、近いうちにまたお会いしましょう」

肩越しにかえりみてヴィアーナに再会を望む別れを告げると、扉は閉まり、馬車は再び走り出した。

モスリーの言葉に驚く時間も別れを惜しむ時間も全て後回しに、ヴィアーナは一目散に我が家へ向かった。

数分後、ヴァリドゥー家にたどり着いたヴィアーナは、突如現れた髪と目の色が違う令嬢に戸惑いつつも目下搜索中の彼女だと認めた門番から、ヴィアーナの母が行方不明となった娘を心配するあまり倒れてしまった事、そして兄ハディールが黙って家を抜け出た妹に烈火のごとく怒っている事を知らされた。

怒れる真紅の鷹

ヴィアーナは屋敷の中へ入ると、執事に濡れたドレスや購入した本を自室へ届けるよう命じてから、まずは彼女の母がいると言う居間に向かった。恐らく怖ろしいご面相をしていると思われる兄ハデイルとの対面は後回しだ。

「お母様！　ただいま戻りました」

ヴィアーナが居間へ入ると、そこには一人掛けの椅子の背もたれに、脱力した様にほとんど仰向けの状態で座る母ヴィアネーラの姿があった。いつものヴィアーナと同じ赤い髪と瞳に真紅のドレスを纏った貴婦人だ。細い眉とまなじりが上がった、少々きつめの高雅な顔立ちはどこらかと言えば兄ハデイル似である。見た目の年齢はヴィアーナの姉で通るほどに若く美しい。小間使いが運んで来た水を、手だけ差し伸ばして受け取っている所であった。

「ヴィアーナ……？」

か細い声とともに、ヴィアネーラは青ざめた顔を入り口の方へ向ける。入口に立った娘の姿を確認すると、彼女は真紅の瞳をこれ以上ないほどに見開いた。

「ヴィアーナ！　何処へ行っていたの！？」

コップを小間使いの持つ盆に置いて、ヴィアネーラは娘に向けて両手を広げた。ヴィアーナは母の元へ駆け寄ると緋色を基調とした草花の模様の絨毯の床に跪いてその腕に飛び込んだ。

「ごめんなさい、お母様！」

ヴィアーナは母の胸の中で謝罪した。ヴィアネーラは力の限り娘を抱き締める。

ヴィアーナの胸の中で次第に罪悪感が膨れ上がった。ちょっとした思い付きでの行動が、これほど母を憔悴させる事になるとは。

「わたくしがどれほど心配したか分かっているの！？ この子は」

「本当にごめんなさいっ、ごめんなさいお母様！ 一人で街へ出てみたかったの。まさかこんな騒ぎになるなんて」

「当たり前です。お前はヴァリドゥー家の大切な一人娘なんですから。いなくなったら家の者総出で街中を探し回るに決まっています。あと一時間、探しても見つからなければハデイル自ら馬を出して国王様に嘆願し、搜索のお触れを出して貰うところでした。もちろん明日の新聞にも載せるつもりでしたよ」

「そんな……大変な事に……？」

ヴィアーナは自分の身体が小さく震えるのを感じた。自分は、何と言う事をしてしまったのだろう。

「それもこれも、貴方がわたくしの大切な娘だからです さあ、顔をよく見せておくれ、ヴィアーナ」

母に言われるまま、ヴィアーナは彼女の腕の中から顔を上げた。ヴィアーナの瞳に涙が浮かぶ。ヴィアネーラはそれ以上詰る事をせ

ず、娘に慈愛の眼差しを注ぎながらその頬に触れ、その感触をひとしきり確認すると今度は金色に変わっている髪を優しく撫でた。

「何て髪をしているの。ああ、キールに魔法で変えて貰ったのね」

キール、と聞いてヴィアーナははっと気付く。居間へ来るまで馬丁のキールの姿を見なかったが、彼はどうしたのだろう。ヴィアーナが街へ出る際に髪と目の色を魔法で変えてくれた彼である。

（まさか、私の事でお兄様から酷い折檻を受けているんじゃない……）

「そう言えば、キールはどうしたの？ お母様」

顔を青ざめさせてヴィアーナが問うと、彼女の髪を撫でていたヴィアーナの手が止まった。

「さ、さあ……」

気まずそうに視線を反らす母に、ヴィアーナは不吉な予感がした。

「あの子、ハディールにひどく怒られていたわね。貴方が一人で出歩こうとするのを、阻止すべき所を手助けをしたのだから、当然と言ったら当然なのでしょうけど……」

ヴィアーナの話尾が小さくなる。ヴィアーナは確信した。冷静そうに見えて気性の激しい兄の事だ。おそらくキールは酷い目に遭った、もしくは今も遭っているに違いない。

「お兄様は今どこに？」

怒られるのも折檻を受けるのも私だけでいい。髪を目の色を変えて貰うのも彼に無理やり頼み込んだ事だ。キールに罪は無いのだから。

「書斎にいるわ 私の手事はもういいから、ハディールの所へ行つてあげて。あの子、本当に貴方の事を心配していたから」

「わかったわ。お母様。それじゃあ夕飯の時にまた」

ヴィアーナは立ち上がる。

「わたくしはもう休みます。貴方の顔を見たから安心して もう眠るだけの気力しか残っていません」

元来身体の弱い母である。ヴィアーナは弱々しく微笑する彼女に自責の念が増した。兄がお説教から解放してくれたら添い寝する事にしよう。

「じゃあ明日の朝に」

兄のお説教は長時間にわたるかもしれないので、提案はすまい。

「おやすみなさい、お母様」

ヴィアーナは母の頬に就寝前の口付けをした。母の微笑が完全に笑顔になる。

「おやすみ、わたくしの愛するヴィアーナ」

口付けを返され、ヴィアーナは一礼すると部屋を後にした。さて、

恐怖の書斎へ向かわねば。

兄はどれほど怒っているのだろつ。怖ろしい。怖ろしくて足が竦む。

ヴィアーナはヴァリドゥー家の書斎兼執務室の重々しい扉の前で躊躇っていた。手は扉にノックする直前で止まっている。

（でも、お兄様に会わない事には事態は正式に終息しないから……）

ヴィアーナが屋敷に帰った時点で執事等から書斎の兄に知らせは届いているかもしれないが、ヴァリドゥー家の人騒がせな炎の馬の搜索部隊はまだ市街地を駆け抜けているはずだ。

心を決めて、ヴィアーナは扉をノックした。ややあつて、入れ、とぶつきらばうなハディールの声がした。声の感じからしても兄は相当怒っているようだ。

「ただいま帰りました。お兄様……」

ヴィアーナが扉を開くと、ハディールは細い金縁の眼鏡をかけ、書斎の奥の書類やインク瓶等が置かれた執務用の机の上に両肘を付き、組んだ手の上に顎を乗せて厳めしく待ち構えていた。視線を合わせるのが怖い。ただでさえまじりの上がった鋭い目つきをしているハディールは、眼鏡をかけると余計に眼光が鋭くなる。

視線を合わすのが怖ろしくて、ヴィアーナは床に目を落とした。黒こげになった大きな物体が目に入り、足を止める。

「う、これ……」

ヴィアーナは声を震わせた。

「お前の不良行為の手助けをした馬丁だ」

ヴィアーナは絶叫した。現実を受け止めきれず、一度では収まらず三度絶叫した。

「キール!!」

ヴィアーナはその物体の前に蹲った。黒こげの物体は、よく見ると年の頃十四、五の少年だった。衣服からして、馬丁のキールに間違い無い。

「酷いわお兄様!! あんまりよ!!」

涙を吹き零しながらヴィアーナはハディールを強く睨み付けた。地上世界の人間どもならともかく、兄がまさか、自分の屋敷に仕える人間にこんな残酷な事をするなんて。

ヴィアーナの批難に、しかしハディールは少しも動じない。片手で眼鏡を正し、ヴァリドゥー家の当主としての尊大かつ冷徹な、いつもの彼の表情で妹を正視する。

「当然だ。つまり今回お前がした軽率な行いはヴァリドゥー家にとってそれほどの重大事だと言う事だ。身をもって思い知るといい」

「そんな そんなあ!!」

ヴィアーナはキールの亡骸にすがって恥も外聞も無くわあわあと泣いた。外の廊下を行き交う家人に聴こえるかもしれないが、そんな事はどうでもいい。ヴァリドゥー家の気性の荒い炎の馬が、この少年には良く懐いていた。気の優しい少年だった。ヴィアーナの命令を断れなかったのだ。

「キールは優しい子だったわ！　うちの馬だってあんなに懐いていたわ！　魔法がちつとも使えない私をなぐさめてくれたわ！　キールは何も悪くないのよ。私が無理やり頼んだだけなのに　それなのにそれなのに、お兄様ったらこんな酷い目に遭わせるなんて！　残酷よ人でなし！　キールの代わりに恨んでやる！　可哀想なキール！」

「自分のした事をすっかり棚に上げてお前は　」

ハディールがぼやく。

「謝るわよ！　ごめんなさいお兄様！　どうも済みませんでした！　返してよ！　キールを！」

無残なキールの遺体から顔を上げ、ヴィアーナが涙の瞳で改めてキールを見つめると、ふいにその胸の辺りが上下したような気がした。目の錯覚だろうか。しかも彼の目の縁のあたりがきらりと光っている。

ハディールが舌打ちしてもう少し堪えろ、と呟く。

「うっ、うっ……」

キールの口元が耐え忍ぶように引き結ばれ、歪んだ。彼の閉じた目の端から涙が一筋、零れ落ちる。

「キール!？」

「もう駄目です旦那様。息を止めるのも苦しいし、これ以上お優しいお嬢様を騙し続けるのは……俺なんかの為にこんなに泣いてくださって……俺は俺はっ」

黒こげの遺体が嗚咽を始めたではないか。ヴィアーナは状況を飲み込めず、眩暈を覚えた。

靴墨を塗っただけです騙して済みませんお嬢様、と大声で叫びながらキールは上体を起こし、ヴィアーナに思考する時間すら与えず、あっと言う間に退場した。

室内に微妙な空気の時間が流れた。

やっと状況を理解したヴィアーナは再び兄を睨む。今度はハディールが目を反らす番だ。

「お兄様……悪戯にしては、質が悪すぎるわ」

努めて表情を陰しくしたヴィアーナは机を回り込んで兄の元へ歩み寄った。

「お前が悪いんだ。軽はずみな事をするから」

言い置き、ハディールは真横に立ったヴィアーナの方に身体を向けた。真紅の瞳は相変わらず怒っている。瞳の中に炎を宿している

ようだった。

「あれでは足りない。お前にはそれ相応の罰を与える」

罰、と聞いてヴィアーナは思わず身を竦めた。兄の魔力が凄まじい事は知っている。人間の住む地上世界の街の一つや二つを眼力で破壊出来るほどだ。そんな兄から、一体自分の身にどんな罰が与えられると言っのか。

ハディールは妹の前に金の指輪が嵌められた手をかざした。今からどんな怖ろしい事が降りかかるのか、とヴィアーナは思わず目を閉じる。

「しばらくこの姿でいろ」

空から降って来た大音響にヴィアーナが目を開けると、目の前には兄ハディールの巨大な靴があった。

「な、何？ 私一体どうなったの？」

ふいに何かに背を摘みあげられ、ヴィアーナの足は宙に浮いた。

「きゃ、きゃあああつ、な、何！？」

そのままどんどん高度が上がっていき、ヴィアーナは足をばたつかせて慌てふためく。分厚い本が並べられた書棚が並ぶ書斎の景色が見える。しかしその何もかもが大きい。つまりヴィアーナの身体が小さくなったのだ。

やがてヴィアーナの高度は厳しい顔付きの兄ハディールの怜悯な

美貌の前で停止した。背を摘んでいるのは兄の指だったようだ。

ハディールは目の前にぶら下がったヴィアーナの姿を見て、指先で彼女を揺らしつつ片方の口の端を吊り上げて悪辣に笑む。

「や、やめて、揺らさないでっ！ 高いっ！ 落ちたら死んじゃう！」

「これでお前は家から容易に出ていけまい。出ようとしても敷地から出るのに何日もかかってしまうだろうな。その間に家の誰かに踏み潰されるかもしれない」

「な、なんて意地悪なお兄様！ もう勝手な事はしないから、早く元に戻してよ！」

「反省の色が無いぞヴィアーナ」

ハディールは机の引き出しを開けると文具の収められたそこにヴィアーナを放り込んだ。

「お前が本当に反省するまで、元に戻す気は無い。まずはそこで頭を冷やせ」

言っと、ハディールは無慈悲にも引き出しを閉めた。

「嫌っ、お兄様！ 暗いのは嫌よ！ 出してっ！」

突然暗闇の中に閉じ込められ、ヴィアーナは喚きながら壁を叩いた。せめてランプくらい欲しいものだ。 引

「ランプも無いわ。あるのは硬くて冷たい床と物言わぬ文具達だけ。こんな所にいたら身体どころか心まで冷え切ってしまいそう」

「文句が多いぞ」

すかさず返って来た兄の声に、ヴィアーナは仕方無く床の上に腰を下ろして兄の怒りが解け許しが出るのを待つ事にした。

「せめてパンとお水をちょうだい。おなかが空いたの。晩御飯をまだ食べていないから」

ヴィアーナが外に向けて声を張り上げると、外で瓶の蓋が開く音や食器の音がした。しばらくして引き出しが僅かに開き、厚手のハンカチと蜜の載った焼き菓子が一つ投げ込まれ、小さくなった茶器に入った紅茶が未開封のインク瓶の口の上に置かれた。

「ありがとう、看守さん。ヴィアーナの願いを聞いてくれて。ハンカチはひざ掛けに使わせていただくわ」

しおらしい声で礼を言う。ヴィアーナは兄の怒りの解き方を本能的に知っていた。怒った兄とは会話するのが何より一番なのだ。

「ところで何してるのお兄様　あ、この紅茶冷めてる…」

不満を漏らしつつヴィアーナは茶器を傍らに置き、先ほど引き出しの中に転がってきた菓子を両手で抱えて齧りつきながら訊く。暗闇と思っていたが、引き出しの間に僅かな隙間があり、そこから光が漏れている。真の暗闇ではないので安心だ。

「お前の搜索を打ち切る為の書き物だ　まったく人騒がせな妹だ」

翼がはためく音と、窓が開く音がした。おそらく市街地の方々へ散らばった捜索隊への撤収命令をヴァリドゥー家を象徴する赤い鷹の使い魔に委ねて飛ばしたのだろう。

「ヴァリドゥー家の厄介者なのね私……」

これは本心だった。魔法も使えない、ダンスも、歌も刺繍も、何一つ合格点が出ないヴィアーナである。このまま社交界に出られなければ自分はヴァリドゥー家にとって何の役にも立たない、お荷物人間ではないのだろうか。最近はそのような気さえしている。

「解ってはいるようだな」

兄の言葉に、ヴィアーナは暗澹たる気持ちになった。焼き菓子を齧る速度が急速に落ちる。本音だろうか。まさか愛している兄からそんな言葉を貰うなんて。

ヴィアーナは焼き菓子を食べ終えると立ち上がり、引き出しの中をさまよい歩いた。底の深い引き出しの中にはインク瓶、切手の入った箱、赤の封蝋や持ち手が金で出来た印璽がある。全てハディールがヴァリドゥー家の当主としての執務に用いるものだ。彼の仕事は何も地上世界に地底の魔法世界の存在を知らしめる事だけでは無い。ヴァリドゥー家は屋敷の敷地だけで無く、田舎に広大な土地を所有している。ヴァール・ドゥナ・ガシユの国王から始祖である真紅の鷹が封ぜられた領地である。ゆえにハディールは歴代の当主がそうしたように、領民の統治、巨大農場の経営なども行っていた。屋敷の中で家族の愛に包まれてのうのと暮らしているだけのヴィアーナとはその身にのしかかる重圧も忙しさも桁違いなのだ。ヴィアーナはヴァリドゥー家の役にも立たず、それどころか迷惑をかけ

て兄の足を引っ張ってしまう自分に何やら嫌気が差してきた。

ヴィアーナは引き出しの隙間からの光で先端を輝かせたペン先の前に足を止めた。

「お兄様、迷惑をかけてごめんなさい。勝手に出歩いて……ヴィアーナは悪い子でした」

「頭が冷えたか。それならそこから出すくらいなら許してやってもいいが」

ハディールはまだヴィアーナにかけた魔法を解く気は無いようだった。小さいままにしておいた方が面倒が起らないと兄は思っているに違い無い。兄にとって面倒でしかない妹なのだ。自分は。

ヴィアーナはペンを持ち上げた。鋭いペン先を胸の前に持つてくる。この胸を突いて死ねば、厄介者の自分がいなくなって、母を除いた兄を始めとするヴァリドゥー家の人間の小間使いに至るまでもがきつと諸手を上げて万々歳だろう。

「不肖の妹ヴィアーナは、これ以上この家に迷惑をかけないよう、お兄様のペンで胸を突いて死にます」

数瞬の後、引き出しの外から返答があった。

「ふ、悲劇の主人公気取りかヴィアーナよ。例の悪書の影響か？ そんな脅しには乗らん！」

兄の罵声を聞き、ヴィアーナは心の中ですすり泣く。なんて冷酷で非情な兄なのだ。妹がこれから死ぬと言っているのに　ちなみ

にヴィアーナが読んだ箇所までは『甘い果実』にそんな展開は無かった。じゃあ本当に自分が死んだらどうなのか。兄はどんな態度を示すのか。いちかばちか。成功すればキールの件の応酬になるだろう。

「さようなら、お兄様」

別れの言葉を告げて、ヴィアーナはぱたりとその場に倒れて死んだふりをしてみた。少し離れた所にある赤いインク瓶を見て小道具に使えば良かった、と思いながら。

お仕置き

書斎の引き出しの中、ヴィアーナが死んだふりをして待ったのは瞬き三回程度のほんの僅かな時間だった。

「ヴィアーナ！？ まさか本当に」

ハディールの手により勢い良く引き出しが引き出される。

「ヴィアーナ！！」

ハディールの叫びが書斎に響いた。文具の入った引き出しの中、鋭く光るペン先の傍らでうつ伏せに倒れた妹ヴィアーナがいるではないか。すぐさまハディールは彼女をつまみ上げて震える片方の手の平の上に載せる。

「何て馬鹿な事を！！ 早く止血をしなければ！！」

しかしハディールの広い手の平の上、金色の髪を散り広げて仰向けに寝かされた小さなヴィアーナはぴくりとも動かなかった。

「私の…ヴィアーナ……う、嘘だろう……？」

兄の手の平の上、息を止めて死んだふりをしたヴィアーナは、しめしめと思いつつ薄目を開けて密かに兄の表情を窺った。信じられない、と真紅の瞳を驚愕に見開いたハディールが小刻みに震えながらかぶりを振るのを見た。やり過ぎだろうか。ヴィアーナが乗っている兄の手もひどく震えている。兄はやはり私を愛してくれているのだ。

そしてハディールがようやく書斎の引き出しの中で起こった惨劇を受け止め、僅かに開かれた彼の唇からとうとう絶叫が響き渡るかと思われたその時。

突如としてハディールは表情を老獪なそれに豹変させた。絶叫の代わりにくっくくつと彼の魔的な笑いが部屋に響く。ヴィアーナはその不気味な笑いに思わずびくりと身体を反応させてしまった。

「私が泣き叫ぶと思ったら大間違いだ　まんまとひっかかる兄と思ったか？　実にくだらん。そう言うのを二番煎じと言うんだ」

何だ。ばれていたのか。ヴィアーナは落胆しつつ、苦しくなつてふう、と息を吐くと、今度は空気をうんと吸い込んで肺に空気を取り込んだ。

「ひどいわお兄様。息を止めて我慢してたのが馬鹿みたいじゃない！」

ヴィアーナはハディールの手の平の上で飛び起きて頬を紅潮させながら兄を睨み付けた。

「やれやれ、いつも自分のした事を棚に上げるな、お前は」

ハディールは妹の視線を受け止めて肩を竦める。

「何の事かしら。ずっと息を止めているのはさぞ辛かったでしょうね、キールは」

言外にこれは先刻の応酬であつたのだと言いつつ、ヴィアーナはハデイルの手の平の上、人差し指につかまり、はるか下方にある開け放たれた監獄、引き出しの中を覗き込む。先ほどヴィアーナが死んだふりをした場所の近くにあつた赤インクの瓶を見てつい口にした。

「やっぱり赤インクを使うべきだったわ」

失敗だつた。ペンで胸を突くと言つておきながら、胸から血の一滴も出ていないのだ。すぐにばれて当然のお粗末な芝居だつた。ヴィアーナは口をへの字にしつつ、立ち上がって衣服や髪の流れを直した。

「お前と言つやつは……」

ヴィアーナがふいに見上げた兄の顔は眉間に皺を寄せ、再び怒りの表情を呈していた。猛禽類のような殺気に満ちた眼光である。

「きゃっ！ 驚かさないでよ！ 怖い顔！」

ヴィアーナが驚いて彼の手の平の上で尻餅を付いたその時、ハデイルは手の平をぎゅっと握り締め、妹を身動き取れぬよう拘束した。

「きゃああ、苦しいっ、苦しいわお兄様、放して、放してようっ」

「苦しむがいいヴィアーナ。少しは私の気持ちを思い知れ！ この不良娘！」

ハデイルはヴィアーナを強く睨み付けながら彼女を握る手に力

を込める。ヴィアーナは悲鳴を上げた。まさか兄が自分にこんな乱暴な事をするとは、思いもよらなかった。まさか、本当に握り潰すつもりなのでは。

「ちょっと！ 死んじゃう、死んじゃうわ、いやいやお兄様っ」

ヴィアーナの必死の叫びに、ふっと彼の手の力が緩んだ。今だ、とヴィアーナが兄の手の中から髪を振り乱しながらなんとか逃れ出した両手を使い、今度は上半身を引っ張り出していると、ハディールの指先がヴィアーナの胸元につんつんと触れた。

「何てドレスを着ている。胸元がぶかぶかじゃないか。仕立て直せ。谷間が見えすぎだ」

溜息混じりにハディールは指摘した。

「こ、これは お母様の」

モスリー、と言う名は伏せた。今あの青年の事を兄に話せば、本当に当分この姿のままでいさせられるに違いない。それは嫌だ。

「や、やめてお兄様、あんっ」

兄から胸を触れられ続けているうち、ヴィアーナはつい妙な声を出してしまった。小さな双丘に触れていた兄の指先がぴたりと止まる。彼の頬に微かに朱が差した。

「人形遊びの趣味はない」

咳払いをしてハディールはヴィアーナを机の上に解放すると再び

目の前の書類に目を落とし、再びペンを取りインクを吸い込ませて書き物を始めた。

「お兄様、怒ってる？」

着地してすぐそこにあつた書類の束の上に腰を下ろし、ヴィアーナは訊く。

「怒りを通り越して呆れた」

紙の上に素晴らしい速さでペンを走らせるハディールは、いつもの冷静な彼であつた。これ以上妹の相手をしてくれそうに無い雰囲気を出している。つまらなくなり、ヴィアーナは机の上を見回した。書類の束の間に飛び出した金色の生地を目を止める。何だろうあれは。ヴィアーナは立ち上がり、近付いてみる事にした。

ヴィアーナは書き物を続けるハディールの目の前を、視界の隅で彼を気にしつつ横切った。ブーツを履いているので机の上でコツコツと硬質な足音がするが、ハディールはそしらぬふりだ。

ヴィアーナがたどり着いたその先にあつた物は、大手百貨店の意匠が金で印字された赤い包装紙に太めの金色のリボンがかけられた包みだつた。誰かへの贈り物だろうか。

「お兄様、これなあに？」

兄はつんとして答えない。

「無視なのね。誰かへの贈り物？ ひよつとして私に？」

兄に恋人がいるなんて、そんな悲しくなるような事は考えたくない。美丈夫にして貴公子然とした兄だ。社交界で兄に言い寄る女性がないわけではないだろうし、目の前の品物は贈られた物かもしれないが、それについてもヴィアーナは深く考えたくない。きっと愛する妹の私宛てだ。そうに違いない。

「リボン解いちゃうわよ。いいわね？」

ヴィアーナは兄の返答を待たずにリボンの端を持って後退した。兄が書き物をしている書類を踏んでしまうが仕方が無い。どんどん後ろへ退がっていくと、するするとリボンが解けていった。

リボンを解くと今度は包装紙を開く。中から茶色の木箱が現れた。中央に何か銘打たれている。どこかで見た事のある意匠だ。

「何かしら……」

わくわくしながら箱の端を両手で持ち上げて中を覗く。そこには白絹の詰め物の中に象牙の骨で出来た赤い扇子が収められていた。縁や象牙の部分は金で装飾されている。

「扇子じゃない！」

ヴィアーナは心を躍らせながら木箱を渾身の力でずらして、灯かりの下で確認した。箱の中へ入り、扇子を取り出して少し開いて見る。赤い絹の布地には流行の絵師の手と思われる貴婦人や赤い薔薇、ヴァリドゥー家の象徴である真紅の鷹がそれぞれ濃淡を変えて描かれていた。

「わああ　お兄様、これ！」

ヴィアーナは目を輝かせて兄を振り仰いだ。ロンドデリルの双子が屋敷に訪れた時、彼女らに扇子見せびらかされたヴィアーナを、きつと彼は不憫に思ったのだろう。

（お兄様はいつだって私の事を考えてくれているんだわ）

「悪い子だ」

それは仕事を終えた後のような伸びやかな口調だった。ハディールは再びペンを置くと眼鏡を置いてヴィアーナを摘み上げ、机を蹴って椅子を少し後退させた後、彼女を元の姿に戻すと自身の膝の上に横座りさせた。ヴィアーナは背に回された兄の腕に背をもたれる。ハディールの膝の上はヴィアーナだけに許された特等席だった。

「お前の喜ぶ顔が見たかったから早く帰ったと言っのに。お前ときたら、髪も目の色も変えて、一体どこで何をしていた。ん？」

低く、この上なく優しい声で訊きながらハディールは膝の上に座らせたヴィアーナの髪に触れた。撫でつけながら本来の真紅に変えていく。紅玉を溶かしてなめらかにしたような、ヴァリドゥー家の令嬢の真紅の髪に。

「キールの魔法にはよく保ったな。目を閉じろ」

ヴィアーナは言われた通りに目を閉じた。ハディールが指先でそっと妹の瞼に触れる。再びヴィアーナが目を開けると、緑色であった彼女の瞳は紅玉のそれに変わっていた。

「街へ行ったの。一人で色々見てみたかったから……そうしたら道

に迷ってしまったて……それで帰るのが遅くなったの」

言いながら、ヴィアーナの胸は痛んだ。短い間に自分はひどく嘘つきになってしまった。心から愛する兄に言えない事など今まであっただろうか。兄に没収された本を買う為に変装して家を出て、道に迷った末に謎の青年と出会った。そして会ったばかりのその青年の屋敷に招かれ、彼と二人だけで時間を共にした。このドレスは彼の母の物だ。そんな事実、目の前の兄がいかに優しかろうと言えるはずもない。

「外出の際は必ず供を付けるようにしろ。そして馬車を使え」

兄は意外な事を言った。

「じゃあ、供を連れて馬車で行けば、私だけでお出かけしてもいいの？」

兄の付き添いがないと外出も許されないヴィアーナであった。しかしハディールは多忙を極め、ヴィアーナが外出できる機会は限られていたのだ。

「近くなら許そう。ただし必ず私が母上の許可を得る事だ。今回のように変装して黙って出て行かれるよりはよほどいい。一人で出歩くななんてもつての他だ。どれほど心配したと思っている」

こいつめ、とハディールは妹を強く抱き締める。ヴィアーナはきやっと笑いながら逃れようと兄の腕の中で暴れた。

「お兄様、やだ、放してったら」

じゃれあっていたその時、ふいにハディールがヴィアーナの頬に手を添え、唇を近付けて来た。ヴィアーナは拒まなかった。自分もそうしたかったから。これは少しの間離れていた二人の、言わば確認作業だ。ヴィアーナは目を閉じる。

唇が重なる。二人はしばらくそのままの状態でした。やがて、ハディールの舌がヴィアーナの唇の間に割り込む。

「んっ」

ヴィアーナは拒絶の意思を示すように兄の逞しい胸をそっと押した。この接吻は駄目だ。兄妹ではいけないのだ。妖しい気持ちになるから。

「ヴィアーナ……」

唇が少し離れただけの、すぐ目の前で自分を見下ろす兄の視線が熱い。

（駄目よ、お兄様、そんな瞳をしないで……）

危険だ。ヴィアーナは慌てて兄の腕から逃れようとするが、力強い腕に抱き締められて逃れられない。そうしているうちに彼の唇がヴィアーナの白い首筋を這う。

「あっ……だ、だめっ」

危機感と心地良さが同時にヴィアーナに襲いかかる。どうして良いのか判らずヴィアーナは小さく震えた。兄の唇が、舌と共に首筋をゆっくりと滑り下りていく。

「ああ……ん……っ、おにい、さ……」

ハディールの唇はヴィアーナの鎖骨の辺りで止まった。彼の手はヴィアーナのドレスの胸の部分をずらし、補正下着を着けた彼女の胸の谷間を露にする。下着は胸の下半分と胴を覆っていた。

「あつ、だ、駄目っ」

ヴィアーナは大いに動揺した。兄は一体、何をするつもりなのか。下着をあともう少しでも下にずらされたら胸が兄の目の前に零れ出してしまうではないか。怯えながらもヴィアーナは兄に瞳で問う。対するハディールは妹を見つめながら、ひどく苦悩するような面持ちをしていた。

次の瞬間、ハディールは眉根をきつと寄せ、何らかの決意を示した後、ハディールはヴィアーナの下着を少し下へとずらした。ヴィアーナの小さな胸の片方、薄く色付いた部分が露になる。ハディールの視線はそこに釘付けになった。

「い、や……おにい……様っ」

頭を振りつつヴィアーナは眩暈を覚えた。一体我が身に何が起ころうとしているのか。

「私のヴィアーナ……本当のお仕置きはこれからだ」

ハディールは乳房を優しく包み込みながら、親指の腹でそつとその中央にある色付いた部分に触れた。ぴくん、とヴィアーナの背がしなる。

「あ、う」

そのままハディールがうつとりとした表情でその場所に愛撫を続けると、ヴィアーナの胸先は次第に隆起し、弾力を帯びていった。

「や、やだ……いや、お兄様っ」

兄の手によって変化する自身の身体に、ヴィアーナの心に遅ればせながら羞恥が訪れる。

ちらり、とヴィアーナは視界の端で兄の次の行動を確認する。彼の舌が尖った胸先に触れようとしていた。

「あっ、ひぁあっ」

ヴィアーナは兄の舌の感触に再び身体をびくりびくりと反応させる。やがて胸先は彼の口に含まれた。

「は、う」

温かい感触と、胸先を転がす舌の動きを感じた。いまだかつて感じた事のない刺激に全身の神経が集中して感度がいや増す。もう許して。許してお兄様。

ヴィアーナは泣きながら兄の頭を押さえ付けて抵抗した。

「……おに……さま……も、許して」

するとハディールは胸先から唇を離した。しかし依然として舌先

は接触したまま濡れた胸先を嬲り続けている。何と淫らな光景だろう。

「もう、やああッ」

ヴィアーナは頬を紅潮させ、しゃくりを上げて泣いた。嫌なのに、片方の胸先も兄に可愛がつて欲しい思いが募る。それほどに心地良い。胸先だけでなく身体の奥が、秘められた場所が甘く疼き出し、じっとしていられずにヴィアーナは腰のあたりをむずがるようにもじもじさせた。

ハディールは妹の反応を見て顔を上げると、いたく感動したように彼女の初々しい痴態を眺めた。

と、その時。扉をノックする音がした。ハディールは慌てず自身の膝に横座りしているヴィアーナを胸に抱き寄せる。次の瞬間扉はハディールの許可を得ずして開いた。

「ハディールや。もうお説教は終わって？」

現れたのはハディールとヴィアーナの母、ヴィアネーラだった。ランプを片手に夜着に真紅のガウンを上から羽織っている。

「母上」

「少し叱りすぎまして。今あやしていた所です」

説明しながらハディールは息の荒いヴィアーナを抱き締め、その背をよしよし、と撫でる。

「まあ。貴方、ただでさえこわもてなのだから女の子へのお説教は優しくしないと　貴方の顔は母親のわたくしでさえ正直怖ろしいもの　本当にお父様似で。少し笑うと卒倒しそうなくらい素敵なところも良く似ているけれども　怖ろしかったでしょうね、ヴィアーナ」

今は亡きヴァリドゥー家の先代当主、ハディールとヴィアーナの父とヴィアーネーラは従兄妹同士の婚姻であり、ゆえにどちらも赤い髪と瞳の、ヴァリドゥーの形質を有していた。

娘を案ずる母の声を受け、ヴィアーナの背に緊張が走る。ヴィアーナはハディールの胸に顔を突っ伏したまま、無言で母に頷いた。胸がはだけて顔を紅潮させたこの姿を母に見られる訳にはいけない。

「大丈夫？　ヴィアーナ」

「ヴィアーナは疲れておねむのようなので、これから私が寝室へ連れて行きます」

「それを聞いて安心しました。ヴィアーナ、明日はお母様が果物のケーキを焼いてあげるから、もう泣かないで。ゆっくりおやすみなさい　それにしても、キールが生きていたみたいだから良かったわ」

貴方、手打ちにするような勢いで書斎に連れて行ったものだから気になって、と呟きながらヴィアーネーラは静かに扉を閉めると部屋を去った。

「　さあヴィアーナ。お仕置きは終わりだ。寝室へ連れて行ってやる」

ヴィアーナは兄のつれない言葉を聞き、憂鬱な表情で彼の首に両手を回した。

言わなければ察して貰えない。けれど、恥ずかしくて口に出来ない。

（もつとして、だなんて）

「何だ？ 甘ったれの妹殿。もちろん抱いて寝室まで運んでやるぞ。まったく世話のやける」

ハディールは意地悪くとんちんかんな返事をする、ヴィアーナを抱えて椅子から立ち上がった。

「…兄様の……じわる」

兄の胸の中、ヴィアーナは小さな声でなじった。ハディールは聞こえぬふりをして移動し、短い呪文で扉を開け放つと廊下へ出た。

「そうだ。明日から新しい家庭教師が来る事になったぞ。良かったな、ヴィアーナ」

「え？ もう？」

ヴィアーナは先ほどの羞恥の涙に濡れた顔を上げた。供を連れてのヴィアーナ単独での外出を許可した癖に、それは無い。

「何がもう、だ。魔術の学院『イグナ・ダヤ』の創設者で私の恩師でもある立派な方だ。お前に相応しい家庭教師がなかなか見つから

ないから、お願いして特別に来ていただく事になったんだぞ。失礼の無いようにな。当分は遊ばず勉強に励め」

「お兄様の、意地悪」

今度はきつぱりと兄を睨み付けて言う。

「心外だな。私はいつだってお前に優しくしているつもりだ」

ハデイルは取り澄ました声で言った後、お仕置きはまたの機会に、と小さな声で妹の耳に囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0187y/>

真紅の館の姫君（S）

2011年10月29日18時29分発行